

図書 紹介

安全。でも安心できない・・・

—信頼をめぐる心理学

著者：中谷内一也(帝塚山大学)

発行：(株)筑摩書房／〒111-8755 東京都台東区蔵前 2-5-3／TEL048-651-0053 (筑摩書房サービスセンター)／新書判／206頁／価格 700円 (税別)／2008年10月10日発行

2007年以降相次いでいる食品偽装・不祥事は、2008年に入って1月のメタミドフォスの混入した中国産冷凍餃子による食中毒、9月の三笠フーズ等による汚染米(アフラトキシン残留と残留農薬基準値超過)の不正転売、中国におけるメラミン牛乳混入事件の丸大食品などへの波及、10月にはパラジクロロベンゼンが検出された日清食品カップめんによる嘔吐等の問題、さらに使用地下水にシアン化合物が検出された伊藤ハム製品への混入の恐れによる回収と跡を絶たない。

本書は「あれが危ない」「これがいけない」というような警告書でも、「大騒ぎしなくても大丈夫だ」と安全性を主張するものでもなく、心の問題を扱う心理学の書であり、「なぜ安全がそのまま安心につながらないのか」を開設し、「安全と安心の関係はどうなっているのか」という答えを探るのがテーマである。

第1章 「安全」だけでは足りない!

第2章 信頼の心理学

第3章 信頼のマネジメント

第4章 価値観と信頼感

第5章 感情というシステム

終章 「使える」リスク心理学へ

各章のサブタイトルを見ていくと、第1章は、安全と安心の違い、安全の被害はないのに・・・、見抜けなくても仕方がない、万全の監視は困難、完全な安心も無理、リスク管理は安心を与えるか、安全をとるか安心をとるかなどである。この章では、安全さえ確保できていれば人びとの安心も確保できると考えている企業や行政部門が現在でも多く、そのような企業や行政は不適切なマネジメントによって人びとから強い不信感を持たれ、自らを危機的な状況に追い込んでしまうことを指摘している。その典型である赤福偽装事件を事例に安全と安心の関係についての説明、さらにミートホープ者、不二家、石屋製菓、比内地鶏につ

いての言及もあり、興味深い。

第2章は、分業社会における安全、分業社会における安心、自分で判断は無理?、信頼に「値すると信頼できるように「みえる」などであり、第3章は、信頼できる人の条件、「正直さ」?、「思いやり」?、「一貫性」?、誠実さの「演出」などである。

第4章は、信頼理論の新たな展開、信頼するのは「第三者」か「仲間」か、花粉症の人そうでない人、結果を重視する人、プロセスを重視する人、信頼の文脈、「関心の低い人」が重要な理由であり、第5章は、信頼だけではない、望ましくないことの課題評価、感情が力を持つとき、感情のシステムと理性のシステム、感情のシステムの合理性などである。

終章は、安全と安心との関係再考、他者への信頼、信頼の要素、自らをさらすという方法、何が重要かは状況が決める、他人事の場合、当事者の場合、人びととの感情と向き合うことなどである。

本書では、安全・安心をめぐる問題は、モノの毒性や危険性というだけではなく、人と人との関係、特に信頼が問題の本質となっており、なぜ安心が信頼によって導かれるのか、信頼を導く要因は何かという問題について解説されている。筆者は科学的根拠により説明ができれば、安心はついてくると思っていたが、適切なマネジメントの重要性を痛感した次第である。量販店の野菜売り場などに見られる「生産者の顔を見せる」やり方にも理解できるようになってきた。安全・安心に関心のある諸氏には是非一読をお勧めする。(学会事務局)